

## 「えっ」の談話機能

大 浜 るい子

(2001年9月28日受理)

wie „e“ im Gespräch funktioniert

Ruiko Ohama

Dieses Papier behandelt Funktionen des japanischen Backchannel „e“ im Gespräch. Backchannels werden eigentlich als ein Ausdruck dafür verstanden, den nächsten Turn nicht zu nehmen und den Gesprächspartner/innen weitersprechen zu lassen. Aber dieser Backchannel „e“ ist von andern Backchannels ganz und gar verschieden, er erscheint eher, wenn man etwas zu sprechen hat und von selbst einen Turn nehmen will. „E“ ist in der japanischen grammatischen Tradition als eine Interjektion von Erstaunen, Verwunderung, und/oder Verdacht klassifiziert. Im Klassenzimmer von Japanisch als Fremdsprache wird „e“ als eine Strategie von Fragen, Bitten, oder Aufforderung unterrichtet. Es scheint uns, daß sich hinter solchen Sprechakten Erstaunen, Verwunderung und/oder Verdacht den vorigen Äußerungen des Gesprächspartners gegenüber verbirgt. Aber in natürlichen Gesprächen können wir oft „e“ finden, obwohl es in den vorigen Äußerungen des Gesprächspartners keinen Inhalt zu erstaunen, verwundern, und/oder zu fragen gibt. Hier wird darüber diskutiert, was für Funktionen dieser Typ „e“ hat. Er sollte als eine Strategie funktionieren, um Initiativität in der Konversationsentwicklung zu vermeiden.

### 0 はじめに

あいづちは、その表現形式によって出現する環境に違いがあるようである。道聞き談話を分析した大浜/山崎/永田(1998)では、道教えに固有の談話展開があり、その過程に見られる各局面において使用されるあいづち表現に違いがあることが指摘されている。またターン交替の仕方とあいづち表現の関係を示唆したものに大浜(2000/2001)がある。これらは、「ああ」「そうそう」「へえー」などが「理解」「共感」「関心」を表す(松田1988)というだけではなく、あいづちには、それらを表すことを利用しながら、ターンの分配や会話の展開を操作するというもう一つの機能があることをうかがわせる。

本稿では、大浜(2000)において、もっぱら自らターンを取得する際に使用されていた「えっ」というあいづちについて、その談話展開上の機能を明らかにすることを目的とする。

通常の発話文とは異なり、あいづちには実質的な内容を含まないものが多い(小宮1986)。そのため、あいづちに「聞いているということを伝える」「ここまで

分かったということを伝える」などの意味を認めながらも、それらの発言がターンを確保したものととは考えないというのが、大方の立場である。さらに研究者の中には、定義の中に「ターンを取らないものであること」を明示しているものもある(White1986、メイナード1993)。そんな中であって、ターンを取得するときこそ使用されるあいづちというのは異色である。大浜(2000)の資料では「えっ」と「おお」がそれにあたる。どちらも驚きを表す語であるという点で共通しているが、「おお」は「えっ」に比べると、出現回数が少ないので、ここでは「えっ」のみを対象とする。

### 1 「えっ」が出現するターン交替タイプ

ところで、「ターンを取得するとき」とはどのような場合であるかを、大浜(2000、2001)によって、整理しておこう。ターン交替のタイプについては、Sacks/Schegloff/Jefferson(1974)が有名である。現在の話し手が次の話し手を決める他者選択、他者選択がない場合に会話の参加者のいずれかが発話権を主張する自己

選択、そして他者選択も自己選択もない場合に現在の話し手が話し続ける場合（大浜 2001 はそれを再保持と名づけている）の 3 タイプである。これらは、あいづちが比較的少ない英語圏のターン交替としては十分かもしれないが、日本語のようにあいづちが多く、あいづちのみで会話に貢献する度合いが高いところでは、あいづちだけの発言もターン交替のメカニズムの中に位置づけることが望ましい。そこで大浜(2000, 2001)では、さらに「割り込み」「取得放棄」「取得再放棄」「最終自己選択」がつけ加えられている。

割り込み：会話の参加者が、現在の話し手の発話権を奪う形で発話権を主張する。あいづちのみの発言はここに含まない。

取得放棄：他者選択がないのに、あいづちが打たれるのみで自己選択が行われない場合。

取得再放棄：取得放棄の後でも、やはりあいづちが打たれるのみで自己選択が行われない場合。

最終自己選択：取得再放棄が 1 回以上続いた後で自己選択がなされる場合。

これらのうち、「えっ」が多く出現するのは「自己選択」と「最終自己選択」の場合である。ターンの取得ということでは、「割り込み」や「再保持」「他者選択」もそうであるが、「えっ」が現れるターン交替のタイプは、「ターン移行適切場所 (TRP) でのターン取得であること」「ターンの保持ではなく、新たなターン取得であること」「自発的なターン取得であること」が特徴である。

## 2 従来の研究から明らかになっていること

### 2-1 文法的研究から

「えっ」は、従来の文法論では一語で一文扱いの感動詞である。感動詞には感動や驚嘆などを表す語の他に、呼びかけ、挨拶、歓声、呪文、嘯し文句など、雑多なものが含まれているが、「えっ」は金水(1983)の整理によると、第Ⅲ類（発始信号）の第 5 種（反応）に位置づけられよう。第Ⅲ類の発始信号とは「あるコンテキスト（言語的・非言語的を含めた）にこの種の感動詞を差し挟んでそこを切れ目とし、そこから新しいコンテキストを始める」もので、「他のいかなる文要素にも先立つ特徴をもつ」ものである。そして、第 5 種の反応とは「外部のコンテキスト（言語的・非言語的を問わない）を受容した際に起こる心理的な反応をとりあ

えず音的に表現したもので、「第Ⅲ類の他の感動詞とは異なり原則的に話し手・聞き手の対立関係を作らない」ものとされている。話し手・聞き手を意識した伝達ではなく、自己の心中を表出しただけのもので、「感動」詞という名称に最もふさわしいグループであるという。

ただ、類の「新しいコンテキストを始める」という性格づけと種の「コンテキストを受容した反応」という性格づけは、必ずしも整合しない。「反応」が「新しいコンテキスト」であるとすれば、全ての発話が新しいコンテキストを始めることになってしまうからである。その意味では、金水の類の説明は第 1 種から第 3 種（呼びかけ、起動、持ちかけ）に焦点を当てたものであり、第 4 種（応答）や第 5 種（反応）は、むしろその後半部分「他のいかなる文要素にも先立つ」が該当するだけであろう。

ところで、種の説明に対しても、小林(1996)が以下の文をあげながら、次のような指摘を行っている。

あっ / あら / あれ / おや、スイッチ入れるの忘れてた。  
 ? え、スイッチ入れるの忘れてた。

すなわち「えっ」は、あるコンテキスト内でも「話者の内部での自然発生的な気づき」には使用されないというのである。そこで、金水を少し修正し、「えっ」の特徴を以下のようにまとめることにする。

「外部のコンテキスト（言語的・非言語的を問わない）を受容した後の推論過程（2-3 参照）で起こる心理的な反応をとりあえず音的に表現したもの。他のいかなる文要素にも先立つ。」

### 2-2 通時的な研究から

森田(1973)は、感動詞の史的変遷をたどると、詠嘆など自己の心中の表出であったもの（森田は融合型と呼ぶ）から、話し手・聞き手の間に心理的距離を作る対立型（呼びかけや応答）へ発展したものが多く見られると言う。先の金水の第Ⅲ類第 5 種に示された「心理的な反応をとりあえず音的に表現したもの」というのは、森田の言う融合型である。

現在われわれが手にする辞書では「えっ」の項を見ると、融合型の「驚き・感動」・疑問」と対立型の「呼びかけ・応答」を併記しているものが多い。

岩波書店広辞苑 1970 :

呼びかける語、意外のことに驚いて発する声

小学館日本国語大辞典 1973 :

力を入れる時のかけ声、驚いたり感動したりする  
ときに発する言葉、呼ばれて答える言葉

学研国語大辞典 1978 :

会話で驚きと同時に疑問を表す語

角川新国語辞典 1981 :

思いがけないことに驚いたり疑ったりしたときの  
言葉、呼び掛ける言葉

三省堂新明解国語辞典 1993 :

強い感動・驚き・疑問などを表す語

### 2-3 日本語教育学的研究から

感動詞が通時的に見て、融合型から対立型へと変化するということから推測すれば、共時レベルでも、融合型である「驚き」や「疑問」が、会話中では相手に働きかけることとなり、説明要求や質問といった対立型の機能をもつのはうなづける。日本語教育の分野では、会話を念頭においた場合が多いので、例えば畠(1988)や尾崎(1993)は、「えっ」を聞き返しの技術として、あるいは反復や確認、説明を要求するための一方略としてあげている。また堀口(1997)も「疑問を含んだ驚き」(P.149)の他に「理由・事情が分からないという反応」(P.155)を「説明要求」の項目であげている。

尾崎(1993)、堀口(1997)によると、聞き返しや説明要求は、以下の場合に行われる。

- (1)発話が聞き取れなかったとき
- (2)聞き取りに自信がもてないとき
- (3)語句の意味が分からないとき
- (4)語句の意味は分かるが、話し手のさしているものやことが具体的に特定できないとき
- (5)発話の言語的意味は分かるが、それで話し手が何を伝えようとしているのかその意図が分からないとき
- (6)発話の言語的意味は分かるが、どうして話し手がそのような発話をするのかその理由や事情が分からないとき

これらは、コミュニケーション場面での発話解釈に際して起こるトラブルに対応している。(1)(2)は発話解釈に不可欠な入力にトラブルがある場合である。入力がかうまくいけば、次にくる操作は「推論」である。発話は文脈内で推論され、表意と推意が導き出されるはずである(Sperber/Wilson1986)。(3)(4)のトラブルは表意を導き出す時に、(5)(6)は推意を導き出す時に、提供された情報だけでは不十分と認識された場合である。関連性理論によると、われわれは発話の処理に要する労力と得られる効果を絶えず測りながら発話文を選ぶ

ので、話し手と聞き手の間で見込みがずれることがあり、(3)から(6)のトラブルは決してまれではない。

このように見てくると、聞き返しや説明要求は入力時のトラブルと推論時のトラブルと言い換えることができる。

### 2-4 先行研究の整理

以上、文法的研究、通時的研究、日本語教育学的研究から得られた知見を整理すると、「えっ」は、以下のよう

「えっ」は「外部のコンテクスト(言語的・非言語的を問わない)を受容した後の推論過程で起こる心理的な反応をとりあえず音的に表現したものである。相手のある会話では、聞き手への働きかけという側面が前面にでる。前者は、「驚き・感動・疑問」などの表明であり、後者では聞き返しや説明要求の機能をもつ。聞き返しや説明要求は、情報処理に必要な入力と、表意、推意を導き出す際の推論時のトラブルを解消するために行われる。「えっ」は他のいかなる文要素にも先立つ

ここであえて確認しておきたいことは、「えっ」を心理的な反応と考えるにしても聞き手への問いかけと考えるにしても、上のいずれの研究でも、それらは外部のコンテクストを受容した直後に起こるものであって、時間を隔てて起こるものとは考えられていないということである。これはまた、われわれの直感とも一致する。ところが実際の会話では必ずしもそうっていない。以下で自然な会話を観察しよう。

## 3 分析資料の概要

ここで観察する資料は以下の2点である。

資料1: 資料収集のために採録を条件に行われた大学生による2人1組の自由会話36個。1998年5月から2001年5月の間に、東広島市で採録。音声のみの資料を文字化したもの。この資料は様々なタイプの「えっ」を収集するために使用される。

資料2: 1人の女子学生が学生10名、社会人10名を相手に行った自然なインタビュー会話20個(合計2時間31分53秒)。会話の冒頭にインタビュアーが投げかける問いかけは全ての会話に共通。但しその後の会話の展開はいずれも、インタビューと言うよりは自由会話に近い。1999年9月から11月にかけて、広島県、愛知県で採録。音声のみの資料を文字化したもの。この

資料は「えっ」の使用と社会的要因の関係を探るために用いられる。

## 4 観察と分析

資料1に現れた「えっ」は、大きく2グループに分けることが出来た。

- (1)「えっ」が直前の相手の発話を受けて発せられていると思われるもの。
- (2)「えっ」が直前の相手の発話を受けて発せられているとは思われないもの。

2-4で見たように、「えっ」は外部のコンテキスト（本資料では会話相手の発話）を受容した際に起こる。その際外部のコンテキストと言え、通常今現在のコンテキストが想定される。すなわち直前の相手の発話を受けて発せられる。これが最初のグループである。この中には次の3つのタイプが区別される。

### 4-1 タイプ1

相手の発話を解釈するのに必要な情報が十分に与えられていないと考えられている場合。これには2-3で見たように、入力時のトラブルに対する反復・確認要求と、表意や推意を導き出すためにさらに情報を求める説明要求が含まれる。このタイプは、「えっ」に続いて要求行為を示す発話が見られる。その多くは疑問文の形を取っている。

#### <入力時のトラブルに対する反復要求>

- J7: あれ、カニサポテンよね?
- J8: 違うよ、デンマークカクタス
- J7: えっ、もう一回言って
- J8: デンマークカクタス

#### <入力時のトラブルに対する確認要求>

- J19: だからどこかに売られていったんだ、身売り
- J20: えっ、身売り?
- J19: 身売り

表意を推論する際に現れた「えっ」には以下のものがあった。表意とは文字どおりの意味に指示付与、曖昧性の除去、富化の処理をおこなって得られる意味であるが、それぞれの処理に必要な更なる情報が要求されている。

#### <指示付与のための説明要求>

- J1: ちょっとそれ取って
- J2: えっ、どれ?
- J1: そこの赤いの

#### <曖昧性の除去のための説明要求>

- J7: お父さんは歌がうまいんよ
- J8: じゃあお父さんが一緒に歌えば?
- J7: いや、なんか嫌、らしいよ
- J8: えっ、いやらしい?
- J7: えっ、嫌、らしい

「好まない」と「みだらな」の多義性を除去できなかった例である。

#### <富化のための説明要求>

- I: この道まっすぐ行ったらね
- J: えっ、まっすぐって君、ビルにぶつかってしまうやないか
- I: あのねえ、まっすぐ言うてもビルにぶつかったらあかん、ビルの横に道があるやろ

表意が推論できても、話し手が何を伝えようとしているのかその意図が分からなかったり、話し手がそのような発話をする理由や事情が分からない場合がある。そのような場合の説明要求は推意を推論するためのものである。

#### <発話意図を推論するための説明要求>

- J5: 俺ふかひれになりたい
- J6: は、ふかひれ?
- J5: うん、ふかひれがいい、俺フォアガ、フォアグラか
- J6: えっ、ふかひれって何?
- J5: ふかひれって
- J6: ふかのひれでしょ?
- J5: うん、や、あんまり知らんけど俺、食ったことない
- J6: 私も分からんけど
- J5: 高いやつよ
- J6: うん、高いのになりたいんだ

J6はふかひれやフォアグラが何であるかを承知している。しかしそれらになりたいといっても実際上不可能であるため、J5の言いたいことが分からない。「えっ」という問いかけに応じて与えられた情報「ふかひれやフォアグラは高い」から「J5は高いのになりたいんだ」ということが明らかになり、推意を導き出すことができたようである。そこでは「高い」に関する曖昧性(も

## 「えっ」の談話機能

のの高さではなく値段)の除去と、値段の高さから「特別な価値のある貴重な存在」という推意への推論のステップがあるが、それについてはトラブルはなかったようである。

＜発話をする理由や事情を推論するための説明要求＞

M: 私ってそんなに鈍感かね

N: えっ、どうしたん?

以上見てきた例はすべて、「えっ」のあとに発話が続いているもので、その発話内容から、要求されているものが何であるか分かるものばかりであった。次のタイプは、後続発話がないものである。

### 4-2 タイプ2

このタイプは「えっ」が単独で現れるため、その機能はあるいはタイプ1と同じ可能性もあるが、特定できないので、心理的な反応の音声表現として別タイプとした。このタイプは意外に少なく、また会話の相手から何の反応も返されないことが多い。その点でもタイプ1と同様の機能とするにはためらわれた。我々の資料では114件のうち9件のみであった。「えっ」に対して相手から明示的に応答があったものはそのうち3件であった。

＜応答なしの「えっ」＞

J7: 秘書検定友達がこないだ受けとってね

J8: うんうん

J7: 落ちたのにね

J8: うん

J7: 問題集くれてね

J8: えっ?

J7: 6月にあるけえ受けることにした

### 4-3 タイプ3

このタイプは、相手の発話の表意も推意も理解した上で、そこから得られる結論を確認したり、さらに詳細な情報を求め、目下の話題を発展させることに貢献するものである。この場合の「えっ」は相手の発話を理解したことが前提となるので、疑問というよりは驚きと理解されやすい。形としては疑問文と平叙文がある。

＜2300円が検査代であるとの結論を確認する＞

J3: 終わってみたら2300円も取られてからさー

J4: えっ、それはなんのお金なん? 検査代とか

J3: 検査代と思うけどー、うん

＜更なる情報をもとめ目下の話題を発展させる＞

J25: N店(注: アルバイト先)もやめた

J26: えっ、なんで?

J25: なんかもやめたくなくなってから

J7: 花が咲いたら、2個分ぐらい残してちぎる

J8: えっ、うち、2個分ぐらいちぎる

### 4-4 タイプ4

以上3タイプの「えっ」は、いずれも相手の直前の発話を受けて発せられていると理解できるものであり、それらは2で見たように、従来「えっ」がもっていると考えられていた「驚き、感動、疑問」あるいは「反復・確認・説明要求」などの機能から逸脱していない。ところが、次に示す第4のタイプは、直前の発話の中に疑問や驚きの対象を見つけることが難しいものである。このタイプには、ずっと以前になされた発話を受けて発せられたと解釈できるもの(例1、例2)と、そもそも何を受けて発せられているのか不明なもの(例3)がある。

#### 例1

(1)p: 2月の終わりに帰ってきて、3月の初め北京に行った

(2)q: あ

(3)p: 知ってるよね

(4)q: あ、あーあ、ああ、そこで会ったんでしょう、Mちゃんとか

(5)p: そうそうそうそうそう

(6)q: KとかYとか

(7)p: そうそうそう

(8)q: いいねえ、pさん言葉の心配ないじゃん

(9)p: そう、全然、全然心配ない

(10)q: えっ、北京だけだったの?

(11)p: うーん、うん、北京だけ

#### 例2

(1) J3: あのねえ眼科に行ってきた

(2) J4: あっコンタクトのやつ

(3) J3: そうそれ、やけえ昨日家庭教師の時に落としてからね、で、ゆったやん、畳の隙間に落ちたって話を(うんうん)んで、あーこら見つからんけんだめやしねえ、ゆうたやん5年も使いよるけんねえ、はああきらめよ



ターン番号	J3の発話内容	J4の発話内容
会話以前	コンタクトを 5年使っていた 畳の隙間に落とした	
1	眼科に行ってきた	
2		→コンタクトのことで?
3	畳の隙間に落とした 5年も使っていた 見つからないから あきらめようと思って 行った	
4		→5年はダメ
5	8年使っている人がいる 8年は使えると思った	
6		傷がついて目に悪い
7	欠けていた もう少し使えと思った	
8		→えっ畳に挟まった 見つからないの
9	畳じゃないかもしれない 見つからない 人の家で探せない 時期も時期だから あきらめようかなと思って	
10		→えっもう目に入っているの

図1 例2における会話者の発言内容間の関係

会話中の軌道修正や話題転換のきっかけを作るといことは他ならぬ「会話を主導する」ことであり、「えっ」は主導をシグナルするものであると言える。

では、次に「えっ」が登場する前には、会話の相手が話題を提供し会話を主導するということをしよとしていないということについて見ていこう。

例1では、pは、「知ってるよね」とqにターンを譲った後、あいづちを打つのみで自らは会話を主導していない。

例2では、図1に網掛けで示したが、J3はターンごとに新しい情報を提供し会話を主導しているように見える。しかしそれらは、二重下線が示すとおり、新しい情報をつけ加えながらも実は同じ趣旨の発言なのである。ターン番号1、3、9はいずれも「眼科に行ってきた」ということが重要なポイントであるし、その間に入れ子のように挿入されたターン番号5、7は「もう少し使えと思った」ということを述べたものである。だから、J3は新情報を提供しているように見えながら、実は全てのターンにおいて同じ発言に留まっているのである。ターン番号5、7でJ3に主導の意志がないことを見て取ったJ4は、(8)の「えっ」で1度目の主導をする。その際により重要度の低い情報「見つからないから」の方を選んで言及したことは先に述べた。しかも「見つからなくなったん?」はJ3の発話内容の

繰り返しであり、その意味では小さな主導である。この時点でもJ4はJ3の主導を当てにしているのかもしれない。しかし、ターン番号9でのJ3の発言はターン番号3や1の繰り返しで、ここでも主導の意志は認められなかった。ターン番号10の「えっ」はそれらの事情をふまえた上で、はじめて「もう目に入っているのか?」という未知の情報を求めたのであり、本当の意味での主導を行ったのである。

例3では、より明確に2人の会話者のいずれもが主導を避ける様子が見て取れる。J14では相手の発話の繰り返しとあいづちのみであるし、J13も同じことを2度言ってあいづちをうつのみである。(例3内の網掛け部分参照)。これらはSchegloff/Sacks(1973)の言う先終了句で「もはやこれ以上言うべきことがない」ことをシグナルしている。「えっ」による主導で会話は終結に持ち込まれる。

以上「えっ」が軌道修正や話題転換などに用いられ、会話に新たな局面を作り出すことを見てきた。そして、それが作り出される前に、会話者のいずれからもそれが先延ばしにされることも見てきた。既に分かり切ったことを長々と話題にしたり(例1、例2)、あいづちを返したり(例3)して、その間に相手が主導してくれることを期待している風である。ここから会話の主導はできれば避けたいものであると考えられていることが見て取れる。われわれの社会では「会話を主導すること」はある種危険なことと考えられていると言えよう。

ここで、既知のことを話題にすることについて、それは決して主導することの先延ばしではなく、確認や念押し行為であり、その意味では会話展開を主導しているときえ言えるのではないかという疑問がおこるかもしれない。しかし、そのようなものとして理解するには少々数が多すぎる。仮にそうだとした場合、それだけ頻繁に確認しなければならぬのか、それも不思議である。われわれの聴覚機能や処理機能に問題があるのか、あるいは慎重さ故なのか疑い深いのか。そうではないだろう。大浜(1998)が明らかにしたように、これが日本語の会話の進め方である。すなわち、日本語では、会話は物語と繰り返しによって展開する話し手主導の形をとる。一方が問いかけ他方がそれに答えるといういわば聞き手主導の会話展開ではなく、聞

き手はあいづちや繰り返しで「聞き手役割」を示しながら、話し手に話し手サイドで企画した物語を語らせるという形をとるのである。その意味では話し手は自分が話したいことのみを話せばよく、話したくないことを話さなければならないことにはなりにくい。話し手に完全な自由が保障されるという意味で、negative faceが尊重される会話展開だと言っていいだろう。われわれの例で言えば、「北京に行った」や「眼科に行ってきた」と話す話し手が会話を主導するのであって、聞き手は話されたことを繰り返すことが協調的な振る舞いなのである。ここでJ4やJ5が既に知っていることを話題にするのは、そのためである。形式的には確認や質問のような形をしていても、既に話されたものである限り、答えは分かっており、相手のfaceを脅かす危険は少ない。ところが、例1の(10)や例2の(8)は繰り返しではない。未知のことを尋ねる質問である。質問は未だ聞かされていない情報をこちらから求めるものであるから、話し手が話すつもりがないことに及ぶ危険性をはらんでいる。その点で、(10)や(8)は聞き手主導となり、日本語の会話の仕方から言えば、協調的なものとは言えない。それを緩和するための方略こそが「えっ」ではないだろうか。新しい情報を求める質問であるにも関わらず、あたかも相手によって提供された情報が驚きや疑問の対象であり質問せざるを得ないものであるかのように装っていると言える。

例3は「えっ」を関係づける発話が見あたらないので、一見不思議な使用であるが、主導が自らの自由意志に基づくものではなく、明示されはしないがどこかでなされた(はずの?)会話相手の発言を受け、驚かされたためにやむなく主導したものであるということを装っていると理解していいだろう。

以上見てきたことをまとめると、「えっ」は会話の主導をシグナルするが、われわれの社会では「主導」を危険なことと認識しているため、驚きや疑問を表す「えっ」が、それを緩和するために利用されているというものである。

ここでもう一度、タイプ1からタイプ3をこの視点から見直してみよう。タイプ4の「えっ」は直前にそれに対応するものがなかったためにわれわれの注意を引いたが、タイプ1からタイプ3は直前に驚きや疑問の対象を見つけることができるものであった。だからわれわれはすなわち「驚きや疑問の表明である」(タイプ2)、「驚き、疑問から反復や確認、説明の要求をしたものである」(タイプ1)、「驚きから更なる情報を求めて会話の展開に寄与するものである」(タイプ3)などと理解し、いずれのばあいも「えっ」の使用には「驚きや疑問」が根底にあるものと疑わなかった。しかし、

本当にそうだろうか。

先に、相手発話の繰り返し、疑念や理解の困難ゆえに行われているのではなく、会話主導を回避するための方略であると述べたが、タイプ1からタイプ3の「驚きや疑問」も、実はそんな形を利用した、対人関係を意識した振る舞い上の工夫ではないだろうか。入力時のトラブルといっても、発声や聴覚上の問題とするには頻繁に起こりすぎる。もしそうなら治療が必要だろう。また驚きや感動といっても顔面通りに受け取れないことが多いのではないか(次ページ例4参照)。むしろそうではなく、聞き返しや問返しによって足踏み状態を作り出し会話を前進させないことや、相手の「驚くべき発話内容」がこちらに発言を強いたように仕組むことが重要なだろう。純粋な驚きや感動、疑問を表明することがあることを否定するものではないが、「えっ」の多くは、会話主導の非自発性を演出する方略として使用されていると考えていいだろう。その意味では待遇的な性格が強い感動詞である。

## 5 「えっ」と使用相手

ところで「えっ」に待遇的な要素があるとするれば、対人関係によって使い分けが行われることは大いに考えられる。ここでは資料2を用いてそれを確かめる。資料2は、一人の女子学生が中高年男女各5名、大学生男女各5名、合計20名にインタビューをしたものである。ここでは、女子学生の発話に焦点を当て、中高年と同年という異なる相手に対して、「えっ」をどのように使い分けているかを観察する。最初の予想では、中高年に対しては会話の主導を控え、同年に対しては主導しやすいためであろうから、「えっ」は、中高年に対して多く使用されるだろうと思われた。ところが結論を先にいうと、結果は予想に反し完全に逆転していた。

表1に示すとおり、「えっ」は対中高年に12回、対同年に45回、合計57回現れた。談話の全時間はそれぞれ、計3985秒、5128秒と対同年の方が長かったが、そのことを考慮しても、対中高年では332.1秒に1回、対同年で114.0秒に1回で、対同年で対中高年の約3倍の割合で多く使用されている。また「えっ」は、全あいづち114種の内、対同年では上位4位に、対中高年では14位に位置しており(表2参照)、中高年に対しては使用しにくい表現であることも分かる。

一見逆転した現象に思えるが、女子学生の発言内容を調べることによって、その原因が明らかになった。すなわち中高年に対してはあいづち以外の発言があまり見られないのである。表1中の潜在的ターン数とは、通常のターン数と、ターンとは言えないがあいづちのみ

の発言数でターンを取ろうとすればとれる回数を合計したものである。対同年では潜在的ターン数の49.3%があいづちのみの発言であったが、対中高年ではそれが63.9%となり、いかに目上の相手には意味内容のある発言はしにくいと考えられているかが分かる。「えっ」は、主導の非自発性を示すものではあるが、それでも意味内容をもたないあいづちに比べると、主導的であると感ぜられるのであろう。

表1 対人別の談話資料データ

	対 中高年	対 同年
談話時間 (秒)	3985	5128
インタビュアーの潜在ターン回数 (回)	710	1137
あいづちのみの潜在ターン回数 (回)	454	560
あいづちのみの潜在ターン出現割合 (%)	63.9	49.3
全あいづち個数 (個)	683	923
「えっ」の個数 (個)	12	45
全あいづちに占める「えっ」の割合 (%)	1.8	4.9

表2 対人別使用上位あいづち表現比較

順位	対同年		対中高年	
1	うん	356	うん	162
2	ああ	101	ああ	114
3	繰り返し	68	んー	41
4	えっ	45	そうですね	40
5			繰り返し	33
6			はい	25
7			言い替え	22
8			はいはい	19
9			ああああ	17
10			なるほど	17
11			うーん	16
12			完成	15
13			あっ	14
14			えっ	12

## 6 おわりにかえて

日本人のあいづちの多さは有名である。外国人からは時には、あまりにも多いのでターンをとろうとしているのではないかと誤解されたりする(水谷1988参照)。しかし、あいづちはむしろターンをとらないための工夫であると言った方が正しい。そんな中であって、自らターンをとろうとするときにこそ現れる「えっ」は、会話の主導性がとりにくい社会の中であえて主導をするために作り出されたものであり、非自発性を示すことで主導の回避を装いながら、主導していく方略である。ところが、主導にそのような装いを必要とす

る社会的上位者にはむしろ使用されず、本来必要のない同年の学生に対して多く用いられていた。このことは、「えっ」によって主導の機会を拡大させるのではなく、既に容認されている主導にさえ特別な言い訳をしなければならぬような、より息苦しい社会を作り出していくことを意味するのだろうか。「えっ」の使用は個人間で大きな差がある。談話中一度も使用しない人がいるかと思えば、例4のように発言ごとに繰り返す人がいる。通常、われわれは後者の人のふるまいを控えめなものとして評価しがちだが、そんなふるまいが何をもたらすか、考えないわけにはいかない。

### 例4

T: あらあ、pさんじゃないですか  
 P: あっ、お久しぶりっす  
 T: えっ、今日学校ですかあ  
 P: うん、ちょっと、調べものがあったねえ  
 T: ああ、えっ、いつ、朝から来てらっしゃるんですか  
 P: いやあ、あのねえ、昼から  
 T: あっ大変ですねえ  
 P: ちょっと、昨日もバイトでね  
 T: ええ  
 P: 夜遅かったから、どうしても、起きるのが遅うなってねえ  
 T: あっそうですよねえ、夏休みはねえ えっ、実家には帰られてないんすか  
 P: いやあ、一応盆前に帰ったことは帰ったけど

## 参考文献

- 畠弘己(1988)「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』7/3 100-117.  
 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版  
 金水敏(1983)「感動詞」『研究資料日本古典文学』12 明治書院 131-134.  
 喜多壮太郎(1996)「あいづちとうなづきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』15-1 58-66.  
 小林可奈子(1996)「感動詞についての一考察」『鹿児島短期大学研究紀要』58 1-11.  
 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態 出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所 43-62.  
 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学 -あいづちに関連して-」『日本語学』7/12 59-66.  
 メイナード・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版

- 水谷信子(1988) 「あいづち論」『日本語学』7/12 4-11.
- 森田良行(1973) 「感動詞の変遷」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院
- 大浜るい子(1998) 「日本人の言語行動 - 談話展開のためのストラテジー-」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号 97-105.
- 大浜るい子(2000) 「日本語のターン交替とあいづち- 母語話者と学習者の比較をとおして-」『広島大学教育学部紀要』第二部第49号 153-161.
- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太(1997) 「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96号 113-124.
- 大浜るい子(2001) 「日本語教育における相づち指導のための提言」JSAA (Japanese Studies Association of Australia) 2001 Biennial Conference  
口頭発表 handout
- 尾崎明人(1993) 「接触場面の訂正ストラテジー「聞き返し」の発話交換をめぐって」『日本語教育』81号 19-30.
- Sacks, H./E. Schegloff/G. Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50. 696-735.
- Schegloff, E./H. Sacks (1973) "Opening un Closing" *Semiotica*, Vol. 8. 289-382. 北沢裕 / 西阪仰訳 (1989) 『日常性の解剖学』マルジュ社 177-241.
- Sperber, D./D. Wilson (1986) *Relevance. communication and cognition*. Harvard. 内田聖二・中遍俊明・宋南先・田中圭子訳『関連性理論 伝達と認知』研究社出版
- White, Sheida (1986) *Functions of backchannels in English: A cross-cultural analysis of Americans and Japanese*. Unpublished doctoral dissertation, Georgetown University.